

## Y8-03

### 看護師と看護助手との業務連携 移動依頼用紙活用による効果

姫路赤十字病院 看護部

田中久美子、若松 良子、藤井 育枝、  
芦田真知子、芝山 富子、世良 優子、  
坂本佳代子、三木 幸代

急性期看護補助体制加算<sup>1</sup>取得に伴う看護助手の増員を活かし、医療安全と質の向上に取り組んだ。

【目的】看護師が移動依頼用紙を活用し、指示（依頼）したことが確実に実施され終了したことを報告を受けて確認し、看護師と看護助手の業務連携のあり方について認識できる。

【方法】看護助手業務は、業務日誌として一人ひとりの看護助手によって自己管理され、看護師と共有している。その中で、他部署からの連絡に伴う移動業務について依頼用紙を活用し指示（依頼）をチェック式で記録し、依頼する。依頼者欄に署名する。依頼内容を復唱して確認の上、実施者はその依頼用紙を受け取り、移動業務を実施し実施者欄に署名する。実施終了したことを依頼された看護師に報告し、報告を受けた者の署名をする。依頼用紙は当日所定の場所に現物保管し、確認事項が発生したときの行為の速やかな確認に繋がる運用とする。依頼用紙は看護師長によって移動業務の情報としてデータ化し、看護師と看護助手の業務連携として評価し、フィードバックする。

【結果】移動依頼用紙は口頭での依頼にとどまらず、歩行介助・車椅子等の移動方法や移動場所を明確にし、視覚的にも確認できるため、情報伝達の性能を高める方法であった。また、指示（依頼）者 実施者 報告者（報告を受けたもの）が各段階で復唱しながら署名するため、依頼したことが確実に実施されているかの確認にも繋がった。職種が増え、看護業務の連携を図るためには、適切な指示（依頼）方法で伝え、実施しやすいように導き、実際に実施できたかを報告を受けて確認できる流れが必要である。そして、お互いをねぎらい、必要な振り返りを行って効果的な連携を図る人間関係を築くことが不可欠である。

## Y8-04

### 当院のNST加算の現状と今後の問題点 について

高槻赤十字病院 NST

桑田由起江、美和 孝之、山本 裕司、  
亮木 道子、内野佐枝香、水谷 勇斗、  
内田 茂樹

【目的】当院は420床の急性期病院でNSTは2005年に全科型として発足した。2010年4月より栄養サポートチーム加算が実施されるに当たって専従者を管理栄養士として申請、同年8月より算定を開始している。申請開始より一年が経過して活動の現状と算定実施後の変化、課題について検討する。

【現状】NSTの対象抽出方法は加算申請前後では見直しは行っていない。NST延べ回診件数は2006年度256件、2007年度383件、2008年度341件2009年度227件2010年度332件であった。件数的には2007年度から減少傾向にあった延べ回診件数が、2010年度は前年度と比べて増加している。NSTの依頼元に関しては、2007年から2009年度の平均は医師：8.9% 看護師：74.1% 栄養士：19.8%であったのに対して2010年度は医師：8.6% 看護師：27.6% 栄養士：53.4% その他：10.3%と管理栄養士からの依頼件数が増加している。また依頼内容に関しても、以前は「食欲不振」「栄養状態改善」が多くを占めていたが、現在では医師から急性期の患者の輸液の調整や、栄養剤の選択なども依頼が出てきている。

【結論】2010年度の新規NST対象者依頼件数は、管理栄養士からの件数が半数以上を占めている。これはNST加算の専従者が管理栄養士となったことで、栄養課の中でもNST対象者の依頼を出す体制作りができてきたためと考えられる。今後の課題としては必要な対象者の抽出漏れをなくし、最適な時期に介入をするために、院内全体の認知度を高め、介入方法の見直しも検討し、チームメンバーの更なる知識の向上が必要であると考えられる。